

柔道整復師国家試験の必修問題の出題傾向について

—第14回から第25回までの出題について—

松本 揚¹⁾, 野田 哲由¹⁾, 末吉 祐介¹⁾, 田辺 達磨¹⁾, 岡村 知明¹⁾, 橋本 俊彦²⁾, 大澤 裕行¹⁾

了徳寺大学・健康科学部整復医療・トレーナー学科¹⁾

了徳寺大学・健康科学部医学教育センター²⁾

要旨

「背景」平成29年3月5日に25回目の柔道整復師国家試験（以下、柔整国試）が実施され、6,727名が受験した。その年度の卒業生である新卒の受験者はこの10年間で最も少ない4572名であった。

柔整国試は現在までに25回実施されており、柔整国試対策の中心となる柔整国試過去問題は毎年増え情報は増している。しかし第25回柔整国試の合格率は全体（新卒と既卒を合わせた）受験者では63.5%と過去最低の結果であり、第23回柔整国試から最低合格率を更新し続けている。これは柔整国試対策の難しさを示唆する数字であるといえる。今回我々は合格率を向上させるために以前報告した続報として、必修問題で出題された柔道整復学についての出題傾向を調べた。

「目的」柔道整復師国家試験の必修問題に出題された柔道整復学・理論編の出題傾向を調査すること。

「方法」第14～第25回柔道整復師国家試験を対象とした。必修問題（全12回）で出題された柔道整復学についての問題を、全国柔道整復学校協会監修の柔道整復学・理論編の目次にのっとり詳細に分類した。その中から出題が多いものを調査した。

「結果・考察」最も出題されていたのは11題出題されていた小児骨折・高齢者骨折の特徴であった。2番目は10題出題されていた骨折の整復法であった。3番目は上腕骨顆上骨折と大腿骨頸部内側骨折から8題出題されていた。過去に出題された傾向と同じく小児骨折や高齢者に多い骨折が出題されることが多い。

キーワード：柔道整復理論, 国家試験, 必修問題

The Tendency of Compulsory Questions in the National Examinations for Judo Therapy Practitioners—14th exam to the 25th exam—

Yo Matsumoto¹⁾, Tetsuyoshi Noda¹⁾, Yusuke Sueyoshi¹⁾, Tatsuma Tanabe¹⁾, Tomoaki Okamura¹⁾,

Toshihiko Hashimoto²⁾, Hiroyuki Osawa¹⁾

Department of Judo Therapy and Sports Medicine, The Faculty of Health Science, Ryotokuji University¹⁾

Medical Education Center, Faculty of Health Science, Ryotokuji University²⁾

Background : On March 6, 2017 the 25th National Examination for Judo Therapy (NEJT) was held.

Purpose : To improve educational effect and the pass rate, we analyzed the tendency of compulsory questions in the national examination. We focused on the theory of Judo Therapy in compulsory questions. The combined success rate of graduates, both new graduates and previous graduates, was

63.5%, the lowest success rate in the history of the NEJT.

24 NEJT have been administered so far. Following each NEJT, the questions from the examination are released and the information about the examination increases.

Method ; We analyzed from the 14th exam to the 25th exam. We classified all the compulsory questions about the theory of Judo Therapy according to the content of the textbook for the theory of Judo Therapy, which was edited by The National Judo Therapist School Association.

Result & Discussion ; Nine questions were about “Characteristic of pediatric fractures and elderly fracture” in the general section, with this category predominating. “Reduction method of fracture” of the general section was second (10 questions) . It was followed by “Femoral neck fracture of the lower limb of the particular” , “Supracondylar fracture of humerus” , in the detail section; each category had 8 questions. There were many questions about the fractures that frequently occur in children and the elderly person in the compulsory questions.

Keywords : Judo Therapist, national Judo Therapist examination, the tendency of compulsory questions

I. 背景

柔道整復師が厚生労働大臣免許となってから現在までに柔道整復師国家試験（以下柔整国試という）は25回実施されている。昨年度行われた第25回柔整国試は6,727名が受験した。過去2番目に受験者数が多かった第24回柔整国試に比べると約400名受験者が減少しているが、1,066名の受験者数であった第1回柔整国試の時に比べると20年の間に受験者が7倍に増加しており、依然として多くの者が柔道整復師を目指し勉学に励んでいる（表1）。

柔整国試の合格率は低下している（表1）。全体の合格率は63.5%と過去最低の合格率であり、この直近3回で最低記録を更新し続けている。新卒者は過去5番目に低い82.9%の合格率であり、既卒者では22.5%（過去8番目）の低い合格率である。これは多くの学校で行われている100%の合格率を目指す国家試験対策が成功していないともいえる。現在まで柔整国試は25回行われており過去問題も増え情報も増してはいるが、100%を目指す柔整国家試験対策の難しさを示唆する数字であるといえる。

また、第25回柔整国試では過去10年間で新卒者の受験者が最低の4,572人、既卒者が最も多い2,155名であった。我々が以前報告¹⁾したように、全体の国家試験合格率を上げるためには既卒者への対策が重要であり、教育機関では既卒者の試験対策をより手厚く行わなければならないと考えられる。

まず、柔整国試の試験科目について説明する。科目は解剖学、生理学、運動学、病理学概論、衛生学・公衆衛生学、一般臨床医学、外科学概論、整形外科学、リハビリテーション医学、柔道整復理論、関係法規の11科目である。問題数は230問あり、必修問題と一般問題に分類される。必修問題と一般問題は第14回柔整国試から明確に分類されたもので、前者は30問、後者は200問となっている。前者は全30問中8割以上にあたる24点以上の取得、後者は全200問中6割以上の120点以上の取得で合格となる（不適當問題が出た場合などは異なる）。

柔整国試に不合格となった原因は明らかにはされていない。しかし我々の教育的経験上では、必修問題が及第点に及ばなかったものが多い。その必修問題30問の内訳は年によって異なるが、解剖学が4問、生理学が3問、柔道整復理論が14～15問、その他が1問出題される事が多い。この事から、必修問題の半分を

占める柔道整復理論の試験対策が重要であるといえる。

我々は以前に、必修問題で出題された柔道整復理論の出題傾向を知ることが柔整国試合格率の上昇に繋がると考えて、必修問題における柔道整復理論に着目した柔整国試の傾向を調査した。今回はその続報をすることで、新卒者の柔整国試合格率のさらなる向上と、既卒者の合格率の大幅な増加を目指す。

Ⅱ. 目的

柔道整復師国家試験対策における教育効果を向上し、合格率を向上させるために、これまでの国家試験の出題傾向を調査、分析した。特に重要となる必修問題における柔道整復理論に着目した。

表1 柔道整復師国家試験の受験者と合格者（合格率）

	受験者(人)	合格者(人)	合格率 (%)		
			全 体	新 卒	既 卒
平成4年度 第1回	1,066	963	90.3		
平成5年度 第2回	1,194	1,059	88.7	92.4	45.8
平成6年度 第3回	1,213	1,005	82.9	90.3	26.8
平成7年度 第4回	1,276	1,063	83.3	92.9	31.8
平成8年度 第5回	1,296	1,137	87.7	96	42.5
平成9年度 第6回	1,251	1,071	85.6	94.1	23.8
平成10年度 第7回	1,266	1,091	86.2	95.9	23.5
平成11年度 第8回	1,260	1,024	81.3	91	14.9
平成12年度 第9回	1,338	1,041	77.8	89.7	22.1
平成13年度 第10回	1,439	1,128	78.4	91.7	21.9
平成14年度 第11回	2,454	2,108	85.9	92.4	35.6
平成15年度 第12回	3,000	2,215	73.8	80.7	15.8
平成16年度 第13回	4,122	2,902	70.4	79.7	26.7
平成17年度 第14回	5,127	3,775	73.2	85.2	32.5
平成18年度 第15回	5,944	4,416	74.3	85.9	33.8
平成19年度 第16回	6,702	5,069	75.6	87.7	32.8
平成20年度 第17回	6,772	4,763	70.3	84.4	24.2
平成21年度 第18回	7,156	5,570	77.8	91.1	40.6
平成22年度 第19回	6,625	4,592	69.3	83.4	21.1
平成23年度 第20回	6,754	5,227	77.4	92.7	37.7
平成24年度 第21回	6,503	4,438	68.2	83.7	13.6
平成25年度 第22回	7,102	5,349	75.3	91.3	32.2
平成26年度 第23回	6,858	4,503	65.7	80.8	14.7
平成27年度 第24回	7,122	4,583	64.3	82.2	22.6
平成26年度 第25回	6,727	4,274	63.5	82.9	22.5

Ⅲ. 方法

第14回～第25回柔整国試を対象とした。必修問題に出題された柔道整復理論について、全国柔道整復学校協会監修の柔道整復学・理論編²⁾の目次に従い詳細に分類した。そこから出題数が多いものを調べた。

Ⅳ. 結果

出題が最も多かったのは11問出題されている総論の「小児骨折・高齢者骨折の特徴」であった。2番目に多かったのは総論の「骨折の整復法」で10問出題されていた。その次は8問出題されていた各論の「上腕骨頸上骨折」と「大腿骨頸部内側骨折」であった(図1)。

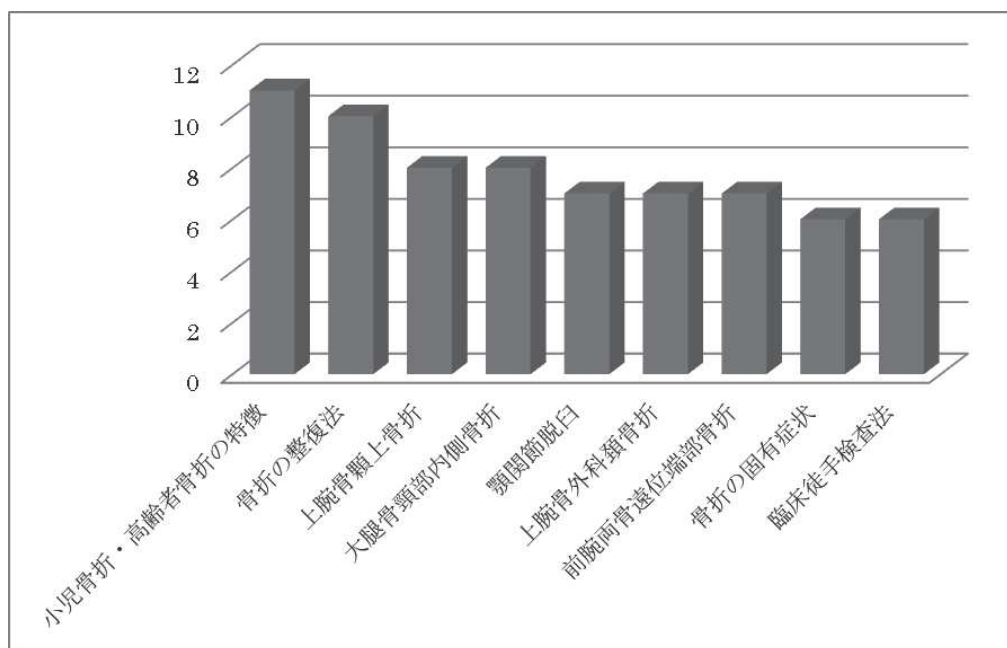


図1 必修問題に出題されることが多い問題

Ⅴ. 考察

第14回～第25回柔整国試必修問題において出題された柔道整復理論の問題は、試験を実施している公益財団法人柔道整復研修試験財団が公式に発表しないため正確な問題数は明らかにできない。そこで本研究では、全国柔道整復学校協会監修の柔道整復学・理論編²⁾の目次に従い詳細に分類した。その結果、柔整国試の必修問題で最も出題が多いのは、総論の「小児骨折・高齢者骨折の特徴」であった。2番目に多いのは総論の「骨折の整復法」であり、3番目は各論の「上腕骨頸上骨折」と「大腿骨頸部内側骨折」であった。この結果は我々が以前報告した結果と同じであった。以前の報告は第22回柔整国試(平成25年度実施)後に発表を行った。その報告から柔整国試は3回実施され、「小児骨折・高齢者骨折の特徴」は2問、「骨折の整復法」は4問、「上腕骨頸上骨折」と「大腿骨頸部内側骨折」は2問ずつ出題されていた。依然として出題されやすい問題の傾向に変化はみられないことが分かった。

小児骨折についての出題が頻発するのは、独立行政法人日本スポーツ振興センター発行の「学校管理下の災害 - 基本統計 - 」³⁾で報告されている「負傷・疾病における種類別発生割合(表2)」から小学生の骨折が増加していること。高齢者骨折については、骨粗鬆症が原因とされる高齢者の4大骨折(大腿骨頸部骨折、前腕両骨遠位端部骨折、脊椎骨折、上腕骨外科頸骨折)は全骨折の33.8%を占めており⁴⁾、発生

が多いことが関係していると我々は推察した¹⁾。平成25年度以降も小学生では負傷の中で骨折がしめる割合が増加しつづけている（表2）。また平成28年度の総務省の発表においても日本の総人口に占める65歳以上の割合は27.3%と過去最高であり、今後も高齢者の骨折は増加していくと考えられる。これらのことから現代社会の骨折発生状況が柔整国試の出題に影響を与えていると考えられる。

先述したように第14回から第25回柔整国試必修問題の出題傾向に変化はみられないが、第25回柔整国試では各論の出題に関して以前と異なる傾向がみられた。それは必修問題で出題されることが多い、上腕骨外科頸骨折、上腕骨顆上骨折、橈骨遠位端部伸展型（コーレス）骨折、大腿骨頸部内側骨折から1問も出題されていなかったことである。各論では上腕骨顆上骨折と大腿骨頸部内側骨折は8問、上腕骨外科頸骨折と橈骨遠位端部伸展型（コーレス）骨折は7問出題されている。しかし、第25回柔整国試で出題されたのは過去に6問出題されている顎関節脱臼、4問出題されている肋骨骨折と鎖骨骨折、3問出題されている指骨骨折、2問出題されている中手骨頸部骨折であった。先述したとおり必修問題には「小児骨折・高齢者骨折の特徴」から出題されることが多く、各論も同様に小児や高齢者に多い骨折が出題されることが多かった。第25回柔整国試では小児や高齢者に多いとされる骨折ではなかった。指骨骨折は我々とは分類方法が異なるが服部らの報告⁵⁾においても出題率が低いと報告されていることから第25回柔整国試の出題は今までとは異なる傾向がみられたと言える。今後も調査が必要である。

第25回柔整国試では出題傾向に変化がみられたが依然として小児と高齢者の骨折が多く出題されている。小児と高齢者の骨折は日本で増加傾向にあり社会的に問題となっており、現代のニーズとして国家の重要課題に関する知識も重要とされているのだろう。こうした社会背景をくみとった柔整国試対策を行う事が、合格率や教育効果を向上させるものと結論した。

表2 負傷・疾病における種類別発生割合（小学生）

独立行政法人日本スポーツ振興センター発行「学校管理下の災害 - 基本統計 - 」

	挫傷・打撲	骨折	捻挫	挫創	切創	脱臼	その他	負傷のその他	関節・筋腱・骨疾患	熱中症	疾病のその他	(%)
平成19年	31.8	20.1	20	10.3	5		12.8					
平成20年	34.7	19.7	20.5	10	4.4		10.2					
平成21年	37.8	21.1	20.2	7.6		3.4	9.8					
平成22年	37.8	21.9	19.4	7.6	2.8		10.4					
平成23年	37.6	22.8	19	7.8		3.5	9.4					
平成24年	34	21	17.8	7.1		3.3		3.7	12	0.1	3.7	
平成25年	31.9	22.5	17.9	7.6		3.9		10.8	1.4	0.1	3.9	
平成26年	31.9	23.4	17.7	7.2		3.8		10.4	1.4	0.1	4	
平成27年	32.4	23.3	17.2	7.1		3.9		10.3	1.5	0.1	4.2	
平成28年	32.3	23.7	17.3	7		3.8		10.2	1.5	0.1	4.1	

参考文献

- 1) 松本揚, 岡田隆, 岡村知明, 橋本俊彦, 大澤裕行 (2015) 柔道整復師国家試験必修問題に出題された柔道整復学理論の出題傾向. 了徳寺大学研究紀要. 9. 97-102.
- 2) 社団法人柔道整復学校協会監修 (2012) 柔道整復学・理論編改訂第5版, 南江堂, 東京. 1-452.
- 3) 独立行政法人日本スポーツ振興センター (2007-2016) 学校管理下の災害 (平成19年-平成28年).
- 4) Kenis JA, McCloskey EV, Johansson H (2013) European guidance for the diagnosis and management of osteoporosis in postmenopausal women. ESCEO. 24 (1). 23-57

- 5) 服部辰広, 久保山和彦, 猪越孝治, 松田康宏, 大曾根舞, 伊藤讓 (2016) 第13回~23回柔道整復師
国家試験に於ける必修問題の出題分析—柔道整復師154問の分析より—. 日本体育大学紀要. 45 (2).
113-117.